

依存したものであると考えられるが、一方で在地掌握のための体制を小代官へ収斂していくという点では、在地勢力の削減を図ったと考える事もでき、後北条氏がその領国支配において必ずしも一方的に在地勢力へ依存していたとは考えられないのではないかとと思われる。

最後に今後の課題について述べていくと、まず今回考察した小代官が確認される地域は、小田原本城領域と後北条氏の領国のなかでも限られた地域であり、設定したテーマについて後北条領国全体を考察の対象とできたとは言えない点が挙げられる。小代官の設置されていない支城領についても考察していく必要があると思われる。また、後北条氏の在地掌握体制の基礎となったと考えられる有力百姓層についても今後より深く考えていきたいと思っている。

【参考文献】

浅倉直美 「後北条領国の郡代制と支城領制」(『後北条領国の地域的展開』岩田書院、一九九七年)

池上裕子 「北条氏の家臣団編成と領国支配」(『戦国大名の研究』吉川弘文館、一九八三年)

池上裕子 「後北条領の公事について」

(『歴史学研究』五二三号、一九八三年)

池上裕子 「名主と定使について」(『戦国

史研究』二八号、一九九四年)

黒田基樹 「北条領国における『小代官』

と『名主』」(『戦国大名北条氏の領国支

配』岩田書院、一九九五年)

〈東洋史学専修〉

百済・高句麗滅亡後の新羅・

唐関係―羅唐戦争を中心に

植田 喜兵成智

七世紀後半の朝鮮半島は激動の時代であった。新羅・高句麗・百済が三つ巴で抗争を繰り広げ、この紛争に唐や倭が干渉した。その抗争の結果、百済と高句麗は滅亡し、新羅による朝鮮半島支配が確立する。これ

によって、いわゆる「統一新羅」(韓国や北朝鮮の学界ではこの概念に懐疑的であるが、本稿では通説的な立場から用いる)という時代をむかえ、その体制は約二百年続く。

新羅は朝鮮半島支配を確立する最後の段階に唐との対決を余議なくされた。この戦いを経て、唐の勢力を朝鮮半島より駆逐し「統一」を成し遂げたと考えられている。この新羅と唐の戦争が「羅唐戦争」と呼ばれ、本論文の考察の対象となる。

筆者自身がこの「羅唐戦争」に関心を抱いたのは、なぜ強大な帝国である唐に朝鮮半島の片隅に基盤を持つに過ぎない新羅が勝利できたのかという素朴な疑問からである。この問いに対し、先行研究からは満足な答えが得られなかった。むしろ羅唐戦争は依然として実態が不明であり、この方面の研究は不十分であるという印象を受けた。さらに研究史を通して、羅唐戦争の実態解明は意義ある研究課題であることを認識するに至った。というのも羅唐戦争は複数

の国々の思惑が絡んでいる紛争であったため、当時の国際情勢に対する認識を深めることができるだけでなく、羅唐戦争は「統一新羅」とそれ以前の画期でもあるため、朝鮮半島の歴史展開を捉えるうえで不可欠の課題になりうるからである。そこで本論文では羅唐戦争の実態に迫り、朝鮮半島の歴史的展開に対する理解及び当時の国際情勢を把握することを課題とした。

第一章においては「羅唐戦争の定義と概略」と題して羅唐戦争と呼称される事件がいかなる戦争であるのか定義の見直しを行った。従来使用されて来た「羅唐戦争」という概念はどの範囲までを羅唐戦争とするのかを定めておらず、その規定は曖昧であった。そこで論文では羅唐戦争を次のように定義した。すなわち羅唐戦争とは高句麗滅亡後の新羅と唐の間に発生した直接的戦闘または間接的な戦闘及びそれらに関する政策の総称である。

このように定義することによって羅唐戦争を五つに分類することが出来る。第一に

新羅と唐の直接対決、第二に新羅の旧百済領（百済故地）への侵攻、第三に唐による高句麗遺民の反乱の征討戦、第四に羅唐戦争期間中の外交交渉、第五に羅唐戦争と関連すると考えられる政策である。若干補足をすると、第二の分類は旧百済領が当時唐の羈縻支配下にあったため、これを新羅と唐の間接的な戦闘と捉えた。第三の分類は高句麗遺民が唐に対して反乱を起こすが、この反乱を新羅が援助していたため、これも新羅と唐の間接的な戦闘であると考えべきであろう。

第二章では「羅唐両国の思惑と戦争の実質的勝者」と題し、羅唐戦争の勝敗結果について再検討した。先行研究において羅唐戦争が新羅の勝利であることは大前提として捉えられてきた。しかし、第一章で根本となる羅唐戦争の定義を行ったが、これにともない新羅と唐の勝敗関係を一度白紙に戻し、その定義に基づいた新たな規準によって戦争の帰趨や勝敗を判断すべきであると考えた。

羅唐戦争の結末に関して、中国側の史料の『旧唐書』等は唐が新羅に勝利したかのように描く。それに対して朝鮮側の史料の『三国史記』では最終的な決戦に勝利したのは新羅であって、羅唐戦争の勝者を新羅であるとしている。このような矛盾は紛争当事国の主観的な論理によって戦争の勝敗が記述されているためで、当然これらの記述の一方のみを信用するのは妥当ではない。戦争とは政治的な目的を達成するための手段であることから、新羅と唐がその政治的目的を達成したかを勝敗の規準とし、実質的な勝者を判定すべきだと考えた。

次いで、羅唐戦争の勝敗の規準となるべき新羅と唐の政治的目的の解明を試みた。唐の諸政策から唐が朝鮮半島に対してはいかなる政治的な目的を有していたかを復元すると、唐は朝鮮半島の各地に親唐的政権を樹立することを政治的目的にしていたと考えられる。これは唐が百済・高句麗・新羅にそれぞれ都督府あるいは都護府を設置し、三国を均等に羈縻支配下に置こうとし

た政策から読み取れる。

一方、新羅の政治的目的については、文武王が唐の將軍の薛仁貴に送った書簡『三国史記』新羅本紀・文武王十一年に記されており、その内容は新羅が百濟故地の侵略を行い、それを唐から問責されたことに対する返書となっている。その中で文武王は百濟の土地と平壤以南の高句麗の土地の領有権を主張しているので、このことから新羅の政治的目的が百濟故地と平壤以南の高句麗の土地の獲得だったと考えられる。

結果的には、唐は高句麗を滅ぼした時点で一時的にはその政治的目的を達成するが、羅唐戦争を経て百濟故地の多くは新羅に奪われてしまった。逆に新羅は百濟故地を手の中にし、平壤以南の高句麗領も一部領有することから羅唐戦争は新羅の勝利と捉えて良いだろう。

第三章では「羅唐戦争の期間」と題して、羅唐戦争の勃発点と終結点を検証した。その期間についても第一章の再定義に従って

通説に再検討を加える必要があるからである。

まず勃発点を検証した。前述の羅唐戦争の五分類の中で最も早く現れたものが勃発点であると考えられる。そこで史料を検討すると、新羅による百濟故地侵攻が勃発点であったことが判断できる。文武王九年五月に唐に謝罪使節が送られており、その謝罪の目的は新羅が勝手に百濟故地を侵犯したことに對する謝罪であり、この時点で既に百濟故地侵攻は開始されていたとみられる。更に時期を限定すると、六六八年九月頃に勃発したと考えられる。その根拠は唐の百濟故地の人事にある。すなわち、六六四年から一貫して唐の朝鮮半島政策に關与していた劉仁願と百濟最後の王義慈の太子である扶余隆が熊津都督府に留まり、百濟故地の管理に当たっていた。ところが、六六八年八月に俄かに劉仁願が罪を得て流罪となってしまう。折しも翌月には唐の征討軍によって高句麗が滅ぼされる時期であった。つまり唐は高句麗征討に力を傾けてい

る最中であり、百濟方面にまで手が回らなかったのである。そのため、劉仁願のいなかった熊津都督府は少なくとも命令系統に混乱があったと考えられる。その隙を衝いて新羅は百濟故地への侵入を開始したのだろう。

次に終結点を検証した。筆者は唐が新羅征討をあきらめ政治的目的を轉換させた時点を羅唐戦争の終結点であると考える。従来の研究では安東都護府の遼東移転、或いは張文瓘の献策による新羅征討中止の決定に政治的目的の轉換を見出していた。しかし、筆者は当時、朝鮮半島政策を担当していた劉仁軌が朝鮮半島から西域方面に人事異動した記事（『資治通鑑』儀鳳二年八月条）に注目し、この人事異動は明らかに唐に政策轉換があったものと推測できるので、この劉仁軌の異動のあった時点が朝鮮半島に對する政治的目的の轉換点であり、羅唐戦争の終結点であるとみなした。以上の考察から、羅唐戦争は六六八年九月に勃発し、六七七年八月に終結したものと結論づけた。

第四章では「羅唐戦争の構造と決定的戦略」と題して新羅が唐に対して勝利した戦略的な要因を追究した。先行研究の多くは新羅の勝利は西域情勢の急変によって唐が新羅征討を中断せざるをえなくなったという消極的な要因によって捉えてきた。しかし、新羅の主体的な戦略が羅唐戦争において反映されなかったと捉えるのはあまりにも新羅の主体性を無視した見方であり、現実に欠けている。そこで羅唐戦争中の両国の軍事行動・外交交渉の因果関係を整理し、新羅のいかなる戦略が決定的な勝因となったのかを分析した。

そもそも西域情勢の変化は羅唐戦争が長期化したために引き起こされたと考えられる。この西域情勢の変化とは吐蕃の勃興と唐に対する侵入のことであるが、羅唐戦争に軍事的人材が多く動員されていたため、唐は吐蕃に対する対応が十分にできなかったと見られる。

次に羅唐戦争の長期化は百濟故地の帰属が唐から新羅に移っていたことに要因を求

められる。百濟故地は交通の要衝であり、中国大陸とは歴史的に水路で結び付いていた。遠征軍である唐軍は補給路としてこの水路を利用していった形跡があり、百濟故地は戦略的に重要な拠点であった。ここを失ったことで羅唐戦争は泥沼化したのだろう。

この百濟故地を占拠する際に新羅の主体的な戦略が実在し、羅唐戦争の決定的な戦略になった。すなわち、新羅が高句麗遺民を支援するという戦略である。新羅は高句麗遺民の反乱が唐によって鎮圧される六七年までに高句麗遺民の反乱を積極的に援助することによって唐の征討軍の主眼を高句麗遺民の反乱の鎮圧に向けさせて、その間に百濟故地の占領を進め六七年二月頃までには完了させる。唐の征討軍が新羅軍と直接的な決戦を行ったのは六七年十二月になってからであり、この頃には百濟故地は新羅の手に落ちていた。このように高句麗遺民の反乱を支援するという新羅の主体的な戦略が羅唐戦争において極めて有効的であったことは当時の紛争地域の考証に

よって裏づけることができる。

以上のように、本論文では羅唐戦争の実態を両国の政治的目的、戦争の期間、戦争の経過及び戦略の分析を通じて明らかにし、併せて西域情勢との関連性を分析することによって羅唐戦争が国際情勢といかに結び付いていたかを跡づけた。

〈西洋史学専修〉

ハインリヒ六世の
ノルマン・シチリア王国征服

宮本 園子

はじめに

古代ローマ帝国の継承者として、「皇帝」の称号を自負し続けた中世のドイツ皇帝にとってイタリア全土の支配は夢であると同時に、従来の皇帝理念から果たされるべき義務でもあった。そしてまた、当時のイタリアは、地中海貿易で非常に栄えた土地であり、経済という現実的な観点からもドイ